

琉球大学学術リポジトリ

第2外国語教育とビデオ教材

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2010-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉井, 巧一, Yoshii, Koichi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/15270

第2 外国語教育とビデオ教材

吉井 巧一

0. はじめに

我が国では、ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語等は、英語を6年間学習した後、大学入学後初めて、所謂第2外国語として学習されるのが一般的である。学習者へのアンケート結果¹⁾を持ち出すまでもなく、これら第2外国語学習/教育の方法・目的等が、英語のそれと異なるのはしたがって当然であろうが、現実には大同小異、或はひとまとめに『外国語』として括られているように思われる。

昨今のように日本即ち日本人の国際化が強調されるまでもなく、外国語教育は大学教育の大きな柱の一つである。本稿では、外国語無用論は論外として、一部に聞かれる英語一本化論(第2外国語無用論/第2外国語選択制)の是非²⁾については立ち入らないが、第2外国語という観点からみた、外国語教育におけるビデオ教材の役割・可能性について、ドイツ語授業の実例も交えながら考察をすすめるものとする。

1. 第2外国語としてのドイツ語

もし、コミュニケーションやグローバルな視野での情報収集/交換という実用的な面が英語学習の大きな目標の一つに置かれたとすれば、ドイツ語等の第2外国語学習の意図は何か。實用論、教養論は一先ずおくとして、英語圏だけにとらわれない、広い意味での異文化理解という目標設定には大方の異論がないであろうと思われる。即ち外国語教育とは、異文化教育の一環として行なわれるものであって、それは語学教育のさらにもう一步先にあるものであると言えようか³⁾。外国語教育=外国語を理解すること/運用すること、コミュニケー

ジョン＝外国語を話すことと短絡的に考えがちであるが、異文化理解という観点に立てば、文法、発音、語彙、聴解、読解、作文等の語学的な面以外に、例えば発想や価値観の相違、慣習、歴史、地誌、文学、政治等の所謂“Landeskunde”（外国事情等）といったものの役割が、大変重要になってくる。そのような意味で学ぶ第2外国語としてのドイツ語教育には、これまでの伝統的な“Grammatik-Übersetzungs-Methode”（文法・翻訳中心授業）だけにこだわらない様々な試みがなされてきている。視聴覚教材を利用する授業もその一つである。

2. ヴィデオ教材

物事を直感的に把握する、具体的に正確に理解する際に、視聴覚教材は極めて有効である。とりわけ地誌や風俗習慣を説明する際に、適切なヴィデオ教材があれば、一枚の写真や言葉での説明が徒労に思えるほどその教育効果は大きい。例えば、東西ドイツ分断の象徴である“Mauer”（壁）や、かつての首都ベルリンのおかれた特殊な状況などを、口頭で説明してみても、全体的な雰囲気はなかなか伝わりにくいのが、映像ならば一目瞭然である。また、言語の音声面を重視するならば、音声単独ではなく、実際の事物や場面と直接結びつけての学習が、所謂“Langzeitgedächtnis”（長期記憶）の理論⁹を持ち出すまでもなく、より有効であることは自明であろう。したがって、上に述べたように、第1外国語である英語とは幾分異なった学習／教育目標をもつであろう第2外国語の授業に、ヴィデオ教材を適切に利用することは、極めて効果的であると言えるのではなかろうか。そこで、視聴覚教材には、音声カセット、レコード、スライド、フィルム、ヴィデオ、ヴィデオディスク、ヴィデオフロッピー等があるが、ここではヴィデオを取り上げ、異文化間コミュニケーションを目的とした第2外国語授業におけるその取り扱い方を見ていくことにしたい。

現在市販されている初級ドイツ語用ヴィデオ教材の代表的なものには以下のものがある：

① 『Guten Tag』

各課15分全26課、白黒、バイエルン放送局／ゲーテ・インスティトゥート製作外国人用初級教材、¥330,000。

制限された語彙による基礎的文法事項・文章構造を含んだ初歩的な会話表現中心。

補助教材：テキスト、教師用指導書、会話練習帳、LL用練習帳、宿題帳。

*続編として中級用プログラム『Guten Tag, wie geht's』（各課15分全26課、¥540,000）あり。

② 『Kontakte』

各課25分全25課、カラー、英国 BBC 製作外国人用初級教材、¥562,000。

日常生活に欠かせない基礎的会話表現中心。実践的運用能力習得を目的とする。各課5分程度、ドイツの都市や文化・生活を紹介する。

補助教材：テキスト、教師用指導書。

*続編として中級用プログラム『Treffpunkt Deutschland』（各課15分全5課、¥112,000）あり。

③ 『たのしいドイツ語：基礎』

各課20分全15課、カラー、三修社製作日本人用初級教材、¥128,000。

各課スキットによる会話、発音・文法指導、会話文のリピート練習などで構成。

補助教材：テキスト。

④ 『NHKドイツ語入門』

各課20分全20課、カラー、NHK／紀伊國屋書店製作日本人用初級教材、¥430,000。

映像とディアロークによる風物スケッチから重要表現を取り出し解

説し、インタビュー中心のドイツ・レポートを加えた4パートで構成。

補助教材：テキスト。

ビデオ教材は、大きくわけて、『見るビデオ（所謂“Objekttext”）』と『参加するビデオ（“Instrumentaltext”）』⁵⁾に二分される。普通授業のいわば単なる穴埋めとして、ドイツの風物や映画などを学期末等に見るための視聴覚教材なら、例えばドイツ大使館やドイツ文化センターなどから多種多様なものが、比較的容易に借り出せるが、実際の初級ドイツ語授業に中心的教材として活用できるビデオ教材となると、上に挙げた四種類が、現在入手できる代表的なものである⁶⁾。

次に、学習者が参加することを要求する、応答や行動を促すinstrumentalなビデオ教材として、上記①・②・④（③はその内容・全体のコンセプトから見て、授業用というよりもむしろ独習用といえるものである。）を選び、数年間にわたり、幾つかの大学における第2外国語としてのドイツ語授業で実際に使ってみた結果を以下に紹介し、第2外国語教育に果たすビデオ教材の役割を具体的に見ていくこととする⁷⁾。

3. 実践的活用例

①『Guten Tag』の特色をもう少し詳しく見ると、以下のような点が挙げられる。

- a. 構成は、5人の登場人物がドイツでおりなす愉快的な26エピソードを通じ、初歩的な会話表現、並びに基礎文法事項・文章構造が習得できるように工夫されている。
- b. 基本となる表現が繰り返し使用されるように状況が設定されており、エピソードの最後に、映像のなかで使用された主要表現を、登場人物がゆっくりと発音し、学習者がリピートする。
- c. テキストは、映像のなかで行なわれる会話の部分（日本語訳つき）、文法事項説明“Wie sagt man auf deutsch?”、語句説明“Wörter und

Wendungen”（英語訳）、練習問題“Übungen und Aufgaben”から構成されている⁸⁾。

この教材を、以下に述べるような方法で映像教材として利用した。

<クラス形態>

第2外国語（必修／選択）としてのドイツ語クラス、学生数40名前後、通年クラス（実質年間授業回数約50回、講義時間週4時間のうち前半2時間はLL教室、後半2時間は普通教室で授業⁹⁾）。

<指導方法>

- | | |
|--|------------|
| I. 予習、予備知識なしで、ビデオ視聴
（テキストは見せない）1回目。 | 15分 |
| II. 語彙・文法説明（日本語で簡単に）。 | 15分 |
| III. ビデオ視聴（テキストを見ながら）2回目。 | 15分 |
| IV. （教師について）本文音読。学生どうしペアになり
ディアロック部分音読。 | 15分 |
| V. 内容理解のための口頭質問（○／×式、Ja／Nein式）、
（ドイツ語／日本語）。 | 15分 |
| VI. 質問受付、ドイツ事情説明、練習問題導入。 | 15分
90分 |
| * ビデオ視聴中に各自持参のカセット・テープに音声録音。 | |
| * 宿題：本文重要部分の暗唱（最初は数行から慣れるにしたがい分量を増やす）、練習問題（テキストなしで口頭でも答えられるように）。 | |
| * 以上LL教室 | |
| | |
| VII. 暗唱部分発表（ペアで／教師と／個人で）。 | 20分 |
| VIII. 練習問題（ペアで／教師と／個人で）。 | 30分 |
| IX. 応用練習（口頭で教師と／グループで／ドイツ人と）。 | 15分 |
| X. 質問受付、重要文法事項等確認。 | 10分 |
| XI. 小テスト（特にディクテーションを多用）。 | 15分
90分 |

*以上普通教室（ドイツ人による練習問題部分の音声テープ作成後は、VII. VIII.の部分も、LL教室で行った）。

以上のような形で、①を数年間利用した結果、次のような感想がアンケートより得られた。

- a. 単なる語学の勉強に留まるのではなく、その言葉を使っている国の社会や文化を窺い知れて非常に興味深い（2年生、男、文科系）。
- b. 文法中心のドイツ語と比べて、面白いだけでなく、興味も沸いてきた。ドイツ語はむつかしいと思うが、楽しく勉強ができていく（2年生、男、理科系）。
- c. 実用的で人間的（2年生、女、理科系）。
- d. ヴィデオの内容が古くさくて面白くない。文法の面で心配である（1年生、男、理科系）。
- e. もう少し文法的なところを学びたい（1年生、女、理科系）。
- f. ペースが早すぎる。覚えること、宿題が多すぎる。暗唱テストがきつかった（1年生、男、文科系）。
- g. 楽だと思ってとったビデオ・クラスだが、大学に入って一番勉強させられた科目だった（1年生、男、文科系）。

事実、①の教材は製作年度が古く（1968年）、基本的なものに限っているため言語表現自体の問題点はないが、白黒場面と相まって、最新のドイツについての情報を提供するという点で、学習者の興味を半減させていた。又、文法説明は意識的に極力簡単に済ませたが、大多数の賛同と、若干の（アンケート上では14.5%：*ドイツ語履修理由の10.5%は『大学院進学のため』）不安を引き起こした。

そこで、②『Kontakte』を選び、ほぼ同様のクラス形態・授業方法で2年間実際に使ってみた。②の①との相違点は、次の通りである。

- a) 製作年度が比較的新しい（1974年）。
- b) カラー作品である。

- c) 日常生活上の現実の本物の会話場面と、スタジオでの重要表現の繰り返しとを交互させながら、より実用性に徹している。
- d) 各エピソード最後（約5分間）に、ドイツの都市や文化・生活を紹介する独立した映像がある（“Instrumentaltext”としてこの部分だけの利用も可能）。
- e) 訳・単語／文法説明・練習問題の指示等が英語である（英国 BBC 製作）。
- f) 分量がかなり多い（①の約3倍程度、適宜取捨選択しプリントにして渡した）。

①と異なり、特に英語圏の学習者を対象としているため、日本人には少しむつかしすぎるということと、電話のかけ方・バスの乗り方等余りに実用性に徹しすぎる点を除けば、大旨好結果を得られた。ただ依然として、文法説明の少なさに対する不安は残ったようであり（9.7%）、英語での説明に対する拒否反応も無視できなかった。

その後、上記①・②の不足部分をほぼ満足させると思われる、④『NHKドイツ語入門』が入手できた。④の目標とするところは、以下の3点である。

- (1) ドイツ語文法の基礎を学ぶ(現在形、現在完了形、話法の助動詞等が中心)。
- (2) 日常生活に役立つ易しい表現と文パターンをおぼえる。
- (3) ドイツの地誌的、歴史的、文化的特徴の概略を理解する。

<各課の構成>

パート1：スケッチ（西ドイツの風物とディアロック）。

パート2：重要表現の説明と発声練習（日本人講師による）。

パート3：文パターンによる応用練習。

パート4：ドイツ・レポート（インタビューを中心としたドイツ事情の紹介）。

この教材は、①・②と比べてディアロック及び練習問題の部分が少なく、全20課と全体の分量も少なめであるため、補助教材として『Deutsche Sprachlehre für Ausländer』（Schulz/Griesbach/Saruta, 郁文堂）を選び、適宜文法説明と練習問題の補完に利用した¹⁰⁾。

その他授業中に試みた方法には、次のようなものがある。

- a. ドイツ人教師とのペアー授業（週2こまのうち日本人教師1こま・ドイツ人教師1こま／或は時には二人同時に授業）。
*種々の事情により中止せざるをえなかった。
- b. 練習問題確認・定着項目の実践と展開として、時々（月に一、二度程度）ドイツ人に来てもらい、学生と実際に会話を交わす機会を作った。
*これは学生側に非常に好評であり、このような会話中心のクラスでは、学習の成果をじかに確認できるため、学習者の喜びも大きく、また勉強意欲を高めるのに効果的であった。ドイツ・ドイツ人に関する質問等を日本人教師が通訳することにより、学習目標との親近間が増し、教材の現実性も増した。
- c. ヴィデオ教材が反応を促しても『ただ見てしまう』ことを避けるため、最新のLL機器で可能となった“Partner-Arbeit”（学生どうし二人一組になり、確認・矯正しあう）／“Gruppen-Arbeit”（4、5人のグループで作業する）を多用した。
*（ペアー学習・グループ学習の導入は、授業の活性化に効果的であった。
：『楽しくやれ、退屈しなかった。』1年生、女、文科系）
- d. 内容理解の確認、練習問題の確認、小テスト等にアナライザーを使用した（大幅な時間の節約が可能）。
- e. 小テストで多用したディクテーションは、最初、日本人教師が読み上げていたが、音声カセット・テープに録音し、『SBL（スキップバックリッスン）機能』付のLL教室で何度も聞かせた。
- f. 授業用言語をドイツ語だけにした。
*極めて不評で、時間のロスも大きかった。以後、“Sprechen Sie mir nach！（後についてくり返さない）”／“Machen Sie das Buch zu！（本を閉じなさい）”等の多用する指示だけをドイツ語で行ない、日本語による説明を中心にした。
- g. 所謂“Gesprochene Sprache（話しことば）”だけではなく、“Geschriebene Sprache（書き言葉）”も適宜補助教材から選択し、辞書活用の訓練も兼

ねて紹介した。

- h. 自分の発音・読みを各自カセット・テープに録音したものを提出させ、チェックした。etc.

4. まとめ

我が国の、大学教養課程における、第2外国語教育の危機が叫ばれて久しい。好むと好まざるとにかかわらず、第2外国語教師が対峙するこの問題にビデオ教材は如何なる寄与を成しうるか。上に挙げた実践例を参考に、その長所、短所、問題点等をまとめてみる。

- * 「意味のある音声」としての言語を、それが実際に運用される「場面」と同時に提示できる。
- * 言語の背景にある、文化や風物等の言語外的情報を具体的に提示できる（“Motivation”喚起の効果大）。
- * 映像+音声だけではなく、映像のみ、音声のみでも利用できる（例えば、音声を消して、大まかな内容をグループで考えさせたり、映像を消して聞き取りに集中させ、穴埋め問題を課したりする作業）。
- * 途中で止められる。すぐ、何度でも繰り返せる。
- * 単調になりがちな語学授業に変化を与え、緊張感を持続できる。
- * 学習成果を、学習者自身がその場で具体的に確認できる。
- * LL教室での文型練習等では、個人のペースによる個別学習が可能である。
- * 実際のな言語運用能力習得に適切である。

- * 機器、教材とも非常に高価である。
- * 特別の教室、保管場所、維持管理者が必要である。
- * 抽象的、論理的な理解力養成には、必ずしも有効とは言えない¹¹⁾。
- * 適切な市販教材が少なく、自主開発教材の作成も現実的には不可能に近い。
- * 内容理解確認のための質問作成等、教授者の負担がかなり大きい¹²⁾。
- * 取り扱える文法項目が、基礎的なものに限られる¹³⁾。

- * 実用面重視の傾向が強く、内容が所謂「浅く、退屈な」ものになりがちである。
- * 機器の操作方法が、複雑そうに見える。

単なる思いつきでその場その場だけ利用するのではなく、それぞれの長所短所を充分踏まえたうえで、全体を見通した授業計画の流れのなかで、どういう教材を、いつ、どのような目的で、どのように利用するのかを明確にすることが必要不可欠であろう。LLやビデオ教材は、低迷をつづける第2外国語教育の「救世主」でもなければ、「スーパーマシン」でもない。普通授業、LL授業、外国人授業と映像授業を如何に効果的に組み合わせていくかが重要である。

当然ながら、LLやビデオ教材が「不可欠、必須のもの」で、すべての外国語教育担当者が利用すべきであるなどと主張するわけではない。“Grammatik-Übersetzungs-Methode (文法翻訳中心授業)” に対立する方法として、“Audiolinguale/Audiovisuelle-Methode (視聴覚中心授業)” を紹介したわけでもない。ただ、視聴覚教育に特に関心があり、機器の操作にも詳しい極少数の教師だけがそれを活用しているというならば、やはり、外国語教育全体の発展からも、問題ではなかろうか¹⁴⁾。

「先ず（一見）複雑な機器の操作方法を充分理解してから、教材研究に取り掛り、そのうえで実際の授業に活用してみよう。」という考え方では、おそらく、いつまでたっても実現はしないであろう。そうではなくて、「自分の行なっている、或は考えている教育目標達成のために、LLなりビデオ教材の利用も必要である。」と判断するならば、それをどのように活用するのか、そのためにはどのような機器の操作を学ぶ必要があるのか、という逆の考え方が良いように思われる。そうすれば、かなり面倒で時間もかかる補助教材の作成等の負担も分担され、スムーズで融通のきく運営となるであろう。

ビデオ教材の活用法は、上に紹介したものだけではない。異文化理解の一環として、風物だけに限定せず、まとまった文学作品や映画・音楽等の鑑賞（日本語吹き替えでも字幕付でもよい）は、外国語学習者の楽しみでもあり、

何時でも歓迎されるだろう。第3の利用法として、学習者の発表や行動をビデオ録画し授業に役立てるということも充分可能である。

岩手大学のドイツ人教師であるJürgen Meutgens氏が、「教養部ドイツ語クラスのモチベーションの問題」として次のような報告をしている¹⁵⁾。

「『…』大学入学時、多数の学生が、ドイツ語圏の文化、学術、政治への興味から第2外国語としてドイツ語を選択したと述べている。『…』ところが遅くとも1年生を終える頃になると、学生の $\frac{2}{3}$ が、単位取得の必要性からのみ、かろうじてドイツ語クラスにかよっているという。『…』

学生は、“Die-Zeit-Absitzen-Haltung（時間が来るまでじっと我慢して座っていること）”で凌ぐ。『…』」

学生のやる気のなさを嘆くまえに、やる気を引き出すために我々がなすべきことはいくらかでもあるはずである。ちなみに我田引水ながら、毎年少数ではあるが、ビデオ・クラス受講生のなかから、2年目の自由選択科目である中級ドイツ語クラスや、ドイツ人教師担当の会話クラス等で、引き続いてドイツ語を学習するものが必ずいるということを付言しておきたい。

以上、第2外国語教育に些かなりとも参考になればという願いを込めて、筆者の僅かで拙い経験を披露した次第である。御教示、御叱正を乞う。

注

1) 学期末ごとに授業の感想等について簡単なアンケートを実施した。主な項目及びその結果を紹介する。

＜第2外国語は大学教育に＞	必要	86.7%
	不要 と思う。	11.1%
＜ドイツ語を履修した理由＞	特になし	48.4%
(複数解答)	先生の勧め	19.4%

旅行等で役に立つ		12.9%	
大学院進学のため		10.5%	
英語の補助		9.7%	
その他		9.7%	
〈第2外国語で中心とすべきは〉			
(複数解答)	：文法	19.7%	
	読解力	39.5%	
	会話	90.8%	
	作文	10.5%	
〈第2外国語が必修科目でなくなれば〉			
	：ドイツ語を履修	する	75.6%
		しない	13.3%
	他の外国語を履修	する	15.6%
		しない	33.3%
〈ビデオ・クラスを選んだ理由〉			
(複数解答)	：会話中心だから	40.0%	
	偶然	37.8%	
	ドイツ・ドイツ人への興味	26.6%	
	文法が苦手	17.8%	

教員がわへのアンケートについては、米井巖『第2外国語教育の現状と問題点』を参照。

2) 我が国の大学における第2外国語教育の危機的状況については、例えば、最近では「日本におけるドイツ語教育の状況をめぐって」(ドイツ語教育部会会報30別冊)やそれに対する反論、「『大学教養課程教育の内容と改善に関するアンケート』調査報告書」(国立大学協会教養課程特別委員会)等でも繰り返し論じられているところであり、日本独文学会ドイツ語教育部会主催シンポジウム「ドイツ語教育の今日の問題」、阪神ドイツ文学会主催「『ドイツ語教育』について自由に話し合う会」等の結果を待つまでもなく、この問題が大学教育全体に重大な影響を及ぼす大問題であることを充分に自覚しておく必要がある。

3) 山川和彦「異文化理解と言語教育」(ドイツ語教育部会会報 25, S. 18-21) 参照：「『…』自分から異文化を発見し、理解しようとする努力が授業の一環として体験されるのは、外国語の授業といえる。とくに第2外国語は、『…』学生に異文化について考えさせることが可能である。『…』」

4) D. E. ルーメルハート著・御領謙訳「人間の情報処理」S. 203 ff.

Bauer, H. L. : Video im Deutschunterricht, S. 3. 参照。

5) 中山純「日本のビデオ教材に関する批評」(ドイツ語教育部会会報 29, S.40-42) 参照。

6) その他筆者未入手のビデオ教材として、“Verlag für Deutsch”社の“Gabi und Frank”, “Andrea”等がある。

7) 1982年4月より1987年9月までの5年半にわたり、琉球大学・沖縄大学・沖縄国際大学の3大学で、延クラス数18、延学生数462名を対象にしての経験に基づいている。

8) 本テキストは、本来のビデオ教材付属のドイツ語版のものではなく、小塩節氏著の日本語版である。ディアローク部分の日本語訳があることと適切な練習問題が付け加えられているため、日本人学習者にとっては好都合である。(三修社、1971、¥1,200、但し前半12課までしかない。)

9) LL教室使用については制限も大きく、必ずしもこの予定表どおりには進まなかった。

10) 前述のごとく、学生には、文法を忌み嫌いながら一方で文法説明の少なさに不安を覚えるという、一見矛盾した面があるが、補助教材としてこのようなオーソドックスな文法教科書と、さらに簡明なドイツ語参考書を持たせておくと、(たとえ授業で取り扱わずとも) 質問に来たり、自主的に勉強したりもするということが間々見られた。

11) 外国語教育における視覚教材の役割の一つとして、イメージ形成という視点を取り上げた田島富美江氏は、「外国語教育における視聴覚的方法」という論考のなかで、『自由ヴェルドルフ学校』の著者 Lindenberg の言葉を引用した後、次のように述べている：「イメージ形成は人間形成にもつながる大きな課題である。抽象的な言葉を無理に視覚教材化するよりは、それをより理解し易い言葉に変えて使用の方が、イメージネーションは豊かになるであろう。言葉に対する反応として求められるものは、誤りを生じない範囲において、学習者自身に自由にイメージを描かせることであり、それは教育上重要なことである。」(Language Laboratory 23, S. 75)

12) これは、極少数の教師だけに負担が掛かる場合であって、後述のように、教材の準備等交代で担当できる体制が整えば、それだけ負担も減り、また、期末試験等にも音声を利用した問題を加えたり、学年統一テストの作成な

ども可能である。

13) 「冠詞・人称代名詞・所有代名詞・動詞現在人称変化・名詞・前置詞・分離動詞・話法の助動詞・現在完了」ぐらいまでが1年間で扱える限度であり、2人称の親称形 (du/ihr-Form) も割愛される場合が殆どであり、「関係代名詞・受動態・複文構造・接続法」等は、2年目にまわさざるをえない。

14) 注12) 参照。

15) Meutgens, J. : Das "Zertifikat Deutsch als Fremdsprache" des Goethe-Instituts im Deutschunterricht des Kyooyoo-bu, (ドイツ語教育部会会報 29, S. 14 f.)

参 考 文 献

Arndt, H./Weller, F.-R. (Hrsg.): *Landeskunde und Fremdsprachenunterricht*, Diesterweg, Frankfurt a. M. 1978.

浅野博『LLと英語教育』 東京書籍, 東京 1976.

Bachmair, Ben: *Medienverwendung in der Schule*, Volker Spiess, Berlin 1979.

Bauer, H. L.: *Hörverstehen*,

id.: *Was ist und wozu dient Video-Learning im Fremdsprachenunterricht*, in: *Unterrichtspraxis und theoretische Fundierung in Deutsch als Fremdsprache*, S. 55-62, S. 195-204, Goethe-Institut München, München 1984.

id.: *Video im Deutschunterricht*, Goethe-Institut Tokyo, Tokyo 1986.

id.: *Video im Unterricht für Deutsch als Fremdsprache*, in: 「ドイツ語教育部会会報 27」 S. 18-23, 日本独文学会ドイツ語教育部会, 東京 1985.

Eppeneder, R. : *Chancen und Probleme authentischer Videotexte im Fremdsprachenunterricht*, in : *Unterrichtspraxis und theoretische Fundierung in DaF*, S. 151-162, 1984.

- Felix, S. W. : *Psycholinguistische Aspekte des Zweitsprachenerwerbs*,
Gunter Narr, Tübingen 1982.
- Freudenstein, R. : *Unterrichtsmittel Sprachlabor*, Ferdinand Kamp,
Bochum 1969.
乙政潤訳 『ランゲージ・ラボラトリー』 南江堂, 東京 1972.
- Grauerholz, U. : *Ein Unterrichtsversuch mit Video-Learning*, in : *Un-
terrichtspraxis und theoretische Fundierung in DaF*, S. 205-216,
1984.
- Lindenberg, C. : *Waldorfschulen*, Rowohlt, Hamburg 1975.
新田義之・新田貴代訳 『自由ヴァルドルフ学校』 明治図書, 東京 1977.
- Neuner, G. u.a. : *Übungstypologie zum kommunikativen Deutschunter-
richt*, Langenscheidt, Berlin 1981.
- Nieder, L. : *Sprechübungen für Schulz/Griesbach Deutsche Sprachlehre
für Ausländer*, Hueber, München 1968.
- Olechowski, R. : *Das Sprachlabor*, Herder, Wien 1973.
乙政潤訳 『ランゲージ・ラボラトリーの効果』 南江堂, 東京 1973.
- Piepho, H. -E. : *Deutsch als Fremdsprache in Unterrichtsskizzen*, Quelle
und Meyer, Heidelberg 1980.
- Rumelhart, D. E. : *Introduction to Human Information Processing*, John
Wiley & Sons 1977.
御領謙訳 『人間の情報処理』 サイエンス社, 東京 1979.
- 田島富美江 『外国語教育における視聴覚的方法』 in : *Language Labora-
tory* 23, S. 64-78, 語学ラボラトリー学会, 東京 1986.
- 山原芳樹 他 『ビデオ検討委員会活動報告 (1)』 in : *VERBA* 5, S.49-
70, 鹿児島大学, 鹿児島 1980.
- 米井巖 『第2外国語教育の現状と問題点』 in : 「研究紀要」28, S. 116-
127, 日本大学人文科学研究所, 東京 1983.

「ドイツ語教育部会会報」(日本独文学会ドイツ語教育部会発行)

「LL通信」(SONY情報システム営業本部発行)

「Language Labolatory」(語学ラボラトリー学会発行)

- * 上記三誌の各種論文・記事からは、外国語教育及び視聴覚教育についての極めて示唆に富む貴重な刺激を無数に頂いた。逐一列挙できないが、ここに附記して謝意を表明したい。

Abstract

Audio-Visual Materials in the *Second* Foreign Language Teaching

Koichi Yoshii

Foreign language teaching has been playing an important part in the educational system at the Japanese university. It is, however, only at this stage that the students start learning the "second" foreign languages like German, French, Spanish, Chinese and so on, the situation which is different from that of English. With this point in mind, one may ask why or for what purpose the second foreign language should be taught. There has been various discussions on this matter, but one may not deny one aspect that it is part of efforts to acquire the means of better intercultural communications. In this sense, we cannot stay teaching simply *about* the target language, i. e. teaching pronunciation, vocabulary, grammar, etc. ; naturally, we must go a step further. One way to carry on this difficult task will be an effective use of audio-visual teaching materials.

This paper reports the results of experiments the author, as a German teacher, has conducted in last 5 years. It shows how conventional classroom sessions, LL sessions, those conducted by the native instructor can effectively be combined, with a particular emphasis on the use of audio-visual materials such as video-films, movies and the like, and what positive or negative factors came out. The total merits and demerits of this teaching program are also considered.